

日仏友好160周年を迎えた 文化交流（上）

～19世紀の「ジャポニスム」から「ジャポニスム2018」まで～

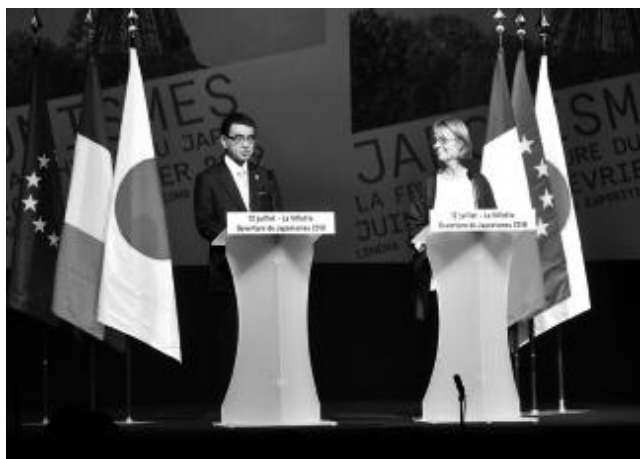
元国際交流基金 吾郷 俊樹

1 はじめに

7月12日、パリ北東のパンタンにあるラ・ヴィレット（1980年代から2000年代にかけて文化大臣、教育大臣を歴任したジャック・ラングが設立構想に携わった科学と文化をテーマにした施設。）にて。日仏友好160周年を記念する「ジャポニスム2018：響きあう魂」の開会式が、直前に西日本地区で発生した未曾有の水害への対応から急遽訪仏を取りやめた安倍総理に代わって河野外務大臣、マクロン大統領に代わってニッセン文化大臣出席の下、盛大に挙行され、7月から2019年2月までにわたる大規模な日本文化紹介行事がいよいよスタートした。

『ジャポニスム2018』の企画は、こうした日仏間の相互交流の成果でもあります。歌舞伎から藤田嗣治の絵画まで、また、三番叟や安藤忠雄の建築を含め、あらゆる日本の創造性の豊かさが、フランスで最も権威ある文化施設で紹介されるでしょう。フランスは「ジャポニスム2018」という冒険と一緒に取組み、この事業の成功を保証するために自らのノウハウの卓越性を分かち合いたいと考えました。日本のアート・シーンの豊かさと多様性をフランスの観客と分かち合うために、『ジャポニスム2018』の事業を受け入れてくれたパリ及び地方の全ての文化施設に対し感謝の意を表します。」（ジャポニスム2018公式サイト マクロン大統領メッセージより）

地元ル・モンド紙は歌舞伎と初音ミクのコラボのステージのカラー写真入りの別冊の1面で、「パリ、日本文化のショーウィンドー」として、以下のように報じる。「2018年7月から2019年2月まで、フランスで「ジャポニスム2018」が開催される。「ジャポニスム2018」は、日本が海外で開催する文化行事として最も大きな規模のイベントの1つとなる。外交官として40年以上のキャリアをもち駐イタリア大使などを務めた安藤裕康国際交流基金理事長は、『今年は、日本の文化に触れたければ、パリに行きなさい』と話していると明かした。東京五輪開催を2年後に控え、日本の文化を様々な方向から紹介し、とくに人々の関心を惹き付けることが「ジャポニスム2018」開催の目的だ。…安倍総理自らが、日仏友好160周年を記念して、このイベント開催を発案し決定した。今年はまた、明治150周年にもあたる。安倍総理はジャポニスム2018年の開会式にマクロン大統領と出席するため12日にパリを訪れる。翌13日は日仏首脳会談が行われる。…」



（ジャポニスム2018開会式 外務省ホームページ
https://www.mofa.go.jp/mofaj/page4_004204.html）

「ジャポニスム2018」開催にあたり、マクロン大統領からのメッセージは、「日本は世界に輝く芸術・文化を有しています。日本文化はフランスの最も著名な前衛芸術家たちに多大の影響を与えましたが、我々の社会が大きく変化した今日においても、日本の創造的な芸術家たちは新たな世代の熱狂を喚起しています。常に新しいものを追及するフランスの大衆と芸術家は、現代日本を発想と革新の持続的な源泉とみています。」

2 ジャポニスム

「ジャポニスム」とは、19世紀、葛飾北斎の浮世絵などが印象派の画家たちに影響を与え、当時のアート界を席卷した日本趣味のこと。モネが描いた「ラ・ジャポネーズ」の着物姿の金髪の女性の絵、ゴッホによる広重の浮世絵の模写などフランス印象派の画家が浮かぶ方が多いかもしれない。

それにとどまらず、ジャポニスムは、20世紀初頭のアール・ヌーボーの装飾芸術にも認められ、エミール・ガレの曲線的なガラス工芸品にはトンボや藤などの日本特有の文様が多用され、陶磁器や家具などにも応用され、世紀末フランスの日常生活にまで広く浸透していったという。

文学の世界でも、ピエール・ロチ（1850-1923）の海軍士官としての長崎の体験を基にした小説「お菊さん」を描き、印象派の画家と深くかかわっていた文豪エミール・ゾラの作品の中でも日本趣味の登場人物が出てくるし、モーパッサンも日本趣味で部屋を飾りたてる中流階級の人を描いており、その時代のジャポニスムの浸透状況を表しているという。

ジャポニスムについては、様々な文献がある中で、フランス政府の文化機関であるアンステイチュ・フランセ東京が、日仏交流160周年記念に提供している蔵書「ジャポニスムと近代の日本」（東田雅博）がわかりやすい。それらを基に以下ご紹介する。

(1) 万国博覧会とジャポニスム

ジャポニスムについて、あるイギリス帝国史研究者は、「日本熱とそれに関連した東洋熱の驚くべき点は、それが画家やデザイナーしか理解できないような奥義の領域にとどまらず、広くいきわたったことである。演劇を通じてそれらは全国にあまねく知られるようになった。また、広範な商業化を通じて、布地、ドレスのデザイン、個人的な装飾に至る広い範囲にわたる影響力を持った。国家行事用の街路の飾りつけに影響を及ぼし、公共建築物・博覧会会場・中産階級の家々の内装の重要な部分となった。安物の模造品は、さらに下層社会の家々を飾ることとなった。」という。

ジャポニスムがどのようにして広がったのかについて、日本から送られた陶磁器の包装紙や緩衝剤などとして使用されていた「北斎漫画」が発見され、マネや

ドガらの画家たちに影響を与えたからという。また、江戸時代、二百数十年に及ぶ鎖国と幕末の開国のためか、ジャポニスムに決定的に重要な要因となったのは、19世紀末の万国博覧会であるという。これらの万博に展示された陶磁器、漆器、竹製品、紙、浮世絵などの展示品がヨーロッパの人々を驚愕させ、日本への憧憬を抱かせることとなったという。

1. ロンドン万国博覧会

まず、1862年のロンドン万博、日本が正式に参加したわけではなく、日本の展示は、初代の在日イギリス公使、サー・ラザフォード・オールコックが中心になって行ったという。おりしも江戸、大阪などの開港延期交渉のために福沢諭吉を含む竹内遣欧使節団が開会式に参加し、日本の展示物を見物しているが、「全く骨董店の如く雑具を集めしなれば見るに堪えないとの感想も残されている。



（ロンドン万博には福沢諭吉も参加、「近代日本人の肖像」より、国立国会図書館蔵）

オールコックは、日本人自身の評判とは裏腹に、日本の文明を高く評価しており、著書「大君の都」で「物質文明に関しては、日本人が全ての東洋の国民の最前列に位することは否定しえない。機械設備が整っており、機械産業や技術に関する応用化学の知識が貧弱であることを除くと、ヨーロッパの国々とも肩を並べることができると言っても良からう。」「全ての職人的技術においては、日本人は問題なしにひじょうな優秀さに達している。磁器・青銅製品・絹織物・漆器・冶金一般や意匠と仕上げの点で精巧な技術を見せている製品にかけては、ヨーロッパの最高の製品に匹敵するのみならず、それぞれの分野においてわれわれが模倣したり、肩を並べることができないような品物を製造することができる、と何のためらいもなしに言える。」

この日本の展示が、現地の人々にどう評価されたのか。万博のガイドブックである「国際博覧会ポピュラーガイド」は、「ここには、我々のコーブランドやミントンが製造するよりも、光沢や薄さで遥かに優れ

ているかの有名な卵殻磁器がある。…これらの製品は何世紀もの間ヨーロッパ文明から自らを閉ざしてきた人々の勤勉さと才能を証明している。」と日本の展示を高く評価している。また、「芸術協会雑誌」も「日本のすばらしい美術工芸品はきわめて多様である。それらの多くはヨーロッパの最高の職人の作品に匹敵するだけでなく、多くの点で勝っている。マンチェスター、バーミンガム、ロンドン、パリは、日本のコレクションのなかに彼らの工房では生産できないか、あるいは生産できたとしても実際には売ることができないほどコストがかかるようなものを見出すであろう…ここに選ばれた全ての作品は、ヨーロッパ人との接触によって援助を受けることが全くなかったと考えられる人々の競争的な生産能力と文明の進歩をあきらかにすることになるだろう。」と日本の美術工芸品を高く評価。

日本人自身の評価よりも外国人からの評価が高いのは、今日、外国人訪日客がありふれた日本人が当たり前と思って見過ごしてしまうような景色を評価して、SNSに載せると、それを見た外国人が殺到することにも似ている。

2. パリの万国博覧会

パリでは、1867年に万博が開催され、906万人の入場者を数えた。日本はこのとき初めて正式に参加。その前年、フランス皇帝ナポレオン三世から幕府宛に、1867年にパリで開催する万博への出品要請と元首招請についての書簡が届く。大政奉還の直前だったが、大河ドラマ「西郷どん」にも出てくる駐日フランス公使、ロッシュからの強い要請を受けて、幕府は時の将軍慶喜の弟、徳川昭武を名代として派遣。昭武は当時14歳で、その随員の中には渋沢栄一もいた。

当時、徳川幕府は、フランスから軍事顧問団を雇い入れるなど、フランスとの関係を強化していた。大政奉還後も、徳川昭武は明治維新後の



(徳川慶喜の名代としてパリ万博に赴いた徳川昭武、「近代日本人の肖像」より、国立国会図書館蔵)

1868年までフランス留学を続け、フランス語、射撃、乗馬、画学、歴史などを叩き込まれているという。

このときは、幕府だけではなく、薩摩藩、佐賀藩も参加。展示品は、武器、楽器、家具、和紙、書籍、陶磁器、漆器、銅器、ガラス器、根付け、「北斎漫画」などの浮世絵、10点ほどの油絵などである。更に3人ほどの柳橋芸者が持て成す日本風茶店もあったという。

この時の日本の出品に対しては、紙・漆器・手細工物・養蚕に対してグランプリが与えられ、家具コレクションと繊維製品コレクションに名誉賞が授与されたという。

和紙について、「ロンドン画報」は、「日本人の作る優秀な紙は、—90種類もあるが—この紙の時代においてですら、ヨーロッパ人にはまだ知られていないような様々な目的に利用されている。彼らは、我々がするような部屋に壁紙を張るだけではなく、紙の衣装や、紙のハンカチーフや、かさももっている。…さまざまな色の日本の紙のとても素晴らしいコレクションが博覧会に出品されていて、われわれにはまだ、それほど完全には知られていないこの国から来る全てのものと同様に、大きな興味をそそるのである」

当時の美術評論家によると「日本の装飾の魅力をなすもの。それは、いつもその装飾の与え方に現れるファンタジーと奇想である。…これら50、100、1000に及ぶ日本の器物…すべてそれらは、まず第一に素晴らしい味わい、独創的な奇想、価値、各器物それぞれに固有の興味ある魅力を持っている。」

3. ウィーン万博

明治時代に入り、1873年のウィーン万博。日本政府として初めて正式に参加した日本の展示はかなりの人気を集めたという。大隈重信が博覧会事務総長に就任し、国威発揚、御貿易拡大を目的としてかなり力を入れたという。

展示品は、陶磁器、漆器、衣服、織物、竹細工、紙製品、生糸などの他に、名古屋城の金鯱、大仏の模型なども出品され、神社や日本庭園なども設けられたという。この日本の展示に対しては、工芸品を中心に198の褒賞が与えられ、万博終了後には出品物を売りさばくために会社が設立されたという。

この博覧会について、ヨーロッパを視察中の岩倉使

節団の「特命全権大使米欧回覧実記」(「特命全権大使 米欧回覧実記」、国立国会図書館蔵)によると、万博について「貿易ヲ盛ンニシ、政策ヲ励マシ、知見ヲ衆ニヒロムルニハ、切要ナル会場ニテ、国民ノ治安、富強ノ媒助トナス設ケナリ」として、万博の意義をとりわけ貿易拡大と、富国強兵と言う観点からとらえている。

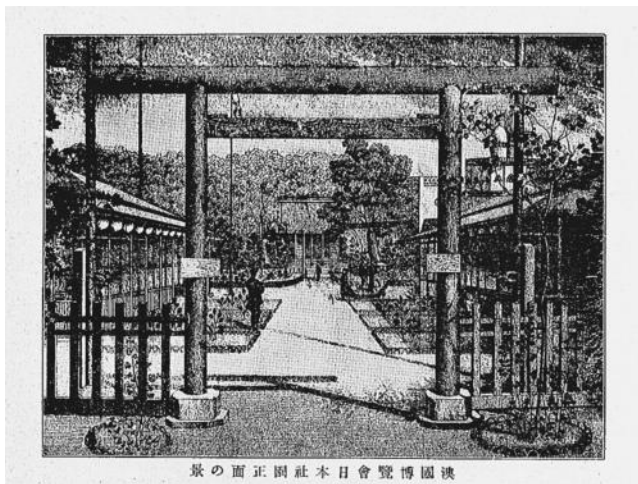


(岩倉具視は、ウィーン万博を視察した、「近代日本人の肖像」より、国立国会図書館蔵)

また、日本の展示品については、「我日本国ノ出品ハ、此会ニテ殊ニ衆人ヨリ声誉ヲ得タリ、是ソノ一ハ、其欧州ト趣向ヲ異ニシテ、物品ミナ彼邦人ノ眼ニ珍異ナルニヨル、其ニハ近傍ノ諸国ニ、ミナ出色ノ品少ナキニヨル、其三ハ近年日本の評判欧州ニ高キニヨル」

ヨーロッパがどのように受け止めたのかについては、イギリスの雑誌「ブラック・ウッズ・マガジン」によると「日本の展示場であなたがたは、彼らの作品の驚くべき優秀性を実感できます。…有名な陶磁器の肌合い、描かれた花々の色彩、そして鳥たちのうぶ毛の色合いは、スタフォードシャーの陶工とおパリの芸術家たちの妬みと絶望をもたらす」とされた。

そして、神社と日本庭園は大いに評判となり、展示物も飛ぶように売れ、うちわは1週間に数千本を売りつくした。皇帝フランツ・ヨーゼフ一世と皇后エリーザベトも来場し、建設中の反り橋の渡り初めを行ったという。



(ウィーン万博での日本庭園・神社、博覧会一近代技術の展示場、国立国会図書館蔵)

4. フィラデルフィア万国博覧会

更に、1876年のアメリカ独立100周年を祝うフィラデルフィア万博。ここでも、日本は国威発揚という目標を掲げ、総裁には大久保利通、副総裁には西郷従道が就任。1966点の展示品は、陶磁器を中心とする工芸品が主であり、漆器、扇、生糸、絹糸なども展示され、日本家屋や売店が建てられたという。日本の展示についての評価は、「1876年万博公式カタログ」によると、「鋳物、磁器、漆器、そして絹製品などの工芸品では非常に優れている。これらの作品のなかには、そのデザインとできばえにおいてヨーロッパの最上の作品に勝るものもある」とされた。

このように、ジャポニスムは、19世紀の一連の万国博覧会が大きな契機となって広がったという。このため、日本からは美術品が海外に大量に流出。京都の清水寺の近くに清水三年坂美術館を建てた村田製作所の創業者の二男、村田理如氏によると、「明治以降、日本は急速に欧米の文化を取り入れ、…幕末・明治の美術品に関心を持つ人がほとんどいなくなってしまったのです。…高額な名品は海外に流出していくのです。一方、海外で一番人気のある日本美術は何かというと、それは幕末・明治の美術品です。」という。日本美術の魅力の欧米諸国への発信により2015年に文化庁長官賞を受けたフランス人美術史家ソフィー・リチャードは、この美術館について「日本では余り知られていない幕末〜明治の美術品に光をあて、大量に海外に流出してしまった作品を展示。…コレクションはその質の高さも、種類の豊富さも、現存する中で最高に素晴らしい」という。この美術館で、当時の超絶技法の印籠や根付けなどを見ると、当時の美術品の海外での人気にも納得。

(2) 旅行記とジャポニスム

また、当時、多くの人々が世界を旅し、開国した日本にもやって来て、旅行記を残している。多くの日本旅行記は、日本への憧憬を掻き立てることとなった。例えば、オーストリア・ハンガリー帝国の外交官、世界旅行家のアレクサンダー・F. V. ヒューブナーの1873年の「世界周遊記」によると、オールコックの「大君の都」、ローレンス・オリファントの「エルギン卿の中国・日本使節記」、ルドルフ・リンダウの「日

本週遊旅行記」などの「有益であると同時に愉快的な書物」を挙げた後で、「とはいえ、そうして語られていることは押しなべて、まったく新しい一世界にいきなり運ばれてきて感じた様々なことを、すべて語りつけていないのである。日本にやってきた者は、誰しも側目を疑う。歩みを勧めるごとに、これはみんな夢ではないか、お伽話ではないか、千一夜物語の一挿話ではないか、そいぶかることになる。それに、目にする光景があまりにも美しいので、雲散霧消してしまうのではないかとおそれるのである」という。

(3) 写真とジャポニスム

更に、この時代に日本に旅した人たちが持ち帰った写真も日本への憧憬を掻き立てた。当時、風景写真が1枚2ドル、100枚ほどのアルバムで200ドルもしたという。

このように旅行記や写真が日本への憧憬を掻き立てたというのは、インバウンドの外国人訪問客がSNSに投稿して、更に外国人訪問客を呼ぶという今日の状況にも似ている。

(4) ビジネスとジャポニスム

そして、多分、重要なことは、ジャポニスムがビジネスにもなったことである。この時代には、ヨーロッパでデパートが初めて登場し、消費の在り方を変えることになる。エミール・ゾラのデパートを舞台にした小説「ご婦人方の幸福」(1883年)の中で、デパートの経営者がジャポニスムに便乗し、上手く商売に利用する場面で「スタートがこれほど慎ましかった売り場も珍しく、今では古いブロンズや象牙や漆塗り製品であふれ返り、年間150万フランもの売り上げがあった。…棚は常に増え続けた。それに売り場は常に新設された。…日本製品の売り場がパリの芸術愛好家の全てを客にするには四年間で十分だった。」と描かれている。

ジャポニスムの影響を受けて、更に、例えば、以下のフランス人が日本への関心を掻き立てたという。

(5) エミール・ギメ

パリの万国博覧会から約10年、フィラデルフィア万国博覧会の年、1876年の末にリヨンの実業家エミール・ギメ(1836-1918)が横浜に来航。帰国と

同時に、フランスに極東の文明を紹介する仕事に没頭し、1878年には「日本散策」を出版して、日本から持ち帰った多くの美術品を用いて、1879年にその名を冠した美術館をリヨンに開館。10年後にパリに移され、「ギメ美術館」として今日に至っており、この美術館はフランスにおけるアジア学の一大中心地となっているという。

(6) ポール・クローデル

作家もまた、日本への関心を広める重要な役割を果たしている。

「詩人大使」と言われた、ポール・クローデル(1868-1955)は、ロダンの弟子であった姉、カミーユ・クローデルが持っていた「北斎漫画」で日本を知る。外交官試験を首席で合格した彼は、1898年、上海副領事代理のときに、旅行で初めて日本に足を踏み入れ、その後、1921年11月に駐日フランス大使として日本に赴任。25年1月から1年間の休暇を挟んで27年2月まで大使を務めた。日仏の文化・政治・経済の交流を図り、渋沢栄一と組んで日仏会館を、大阪商工会議所会頭の稲畑正太郎ら関西財界人の要望を受けて関西日仏学館を開設。これが今日のアンスティチュ・フランセの前身。京都大学のそばにあるアンスティチュ・フランセ関西には、姉カミーユ・クローデルの手によるポール・クローデルの胸像が飾られている。



(アンスティチュ・フランセ関西、落成式の記念ボードには「會館建設功勞者 佛國大使ポール・クローデル殿、貴族院議員稲畑正太郎殿」の名)

文学者としては、日本の古典芸能(特に能)と絵画に強い関心を示し、更に、日本の文化から多大な影響を受けて、自分の劇作術や文学観を一新することとなったといわれる。

大使としては、この他、当時、日仏関係で懸案になっていた仏領インドシナの関税問題解決の模索という重要なミッションについて、メルラン インドシナ総督の来日という成果を上げており、これを契機に関税問題が解決していったという。

クロデル大使は、駐日大使の後、駐米大使、駐ベルギー大使になり、1955年に亡くなったときは、ノートルダム大聖堂で国葬されている。なお、今のフランス外務省のマセ次官の前職は駐日フランス大使であり、「ジャポニスム2018」の日仏合同委員会のフランス側トップを務めていた。

(7) アンドレ・マルロー

また、アンドレ・マルローは、フランスで20世紀のもっとも偉大な作家の一人と言われ、ド・ゴール大統領時代の文化大臣。マルローが日本と出会ったのは、まだ15歳にもならない頃、「子供の頃、ときどきギメ美術館に連れて行かれた。…日本の磁器は洗練の極みに思えた。」という。マルローは18、9歳の頃から日本の美術雑誌「国華」（朝日新聞社刊）を集め始め、度々日本を訪れている。政府の要人であるマルローが日本の芸術表現に関心をもっていることで、展覧会やイベントが自然と増え、文化大臣のときには、ミロのヴィーナスの日本貸出しをするなど、日本でフランス関係のイベントが、フランスで日本関係のイベントが行われた。ミロのヴィーナスの展覧会の入場者は172万人に達したという。

3 「ジャポニスム2018」のコンセプト

(1) 「ジャポニスム2018」への期待

そして、日仏修好通商条約が締結されてから160年となる2018年、「ジャポニスム2018」は2018年7月から2019年2月までパリを中心にフランスで実施されている。伝統から現代まで、展示、公演、映像、生活文化などの多種多様な日本文化・芸術を紹介する一大プロジェクト。

本プロジェクトの実務を取り仕切る国際交流基金 増田是人ジャポニスム事務局長は、「『ジャポニスム2018』を通じて、フランス人が19世紀に味わったような新鮮な驚きと発見をしていただき、これが新たなジャポニスム旋風を巻き起こすことを期待しています。」と語る。

(2) 浮世絵

ジャポニスムのきっかけになったのが葛飾北斎の浮世絵だったといわれているように、今日においても、フランスにおける日本美術の代名詞は「浮世絵」で、ゴッホは浮世絵を何百枚も持っていたというし、今もパリの美術館では頻繁に浮世絵展が開催され、常に賑わっているという。

今日、日本人でも浮世絵に馴染みのある人はあまり多くないのではとも思うが、興味のある人には、毎年秋に日本浮世絵商協同組合が銀座で開催する浮世絵オークションは、素人でも入札に参加できる。日曜日に行われるオークション前に2日間ほど下見期間があり、その間、じっくり作品を見ることができる。それぞれの浮世絵には美術館の浮世絵には決してついていない値札がついている。とても手が出ないかと思いきや、そうでもなく、オークションは最低1万円の「成行き」から競り上げ方式。結構、買えそうなものもある。やはり値が張るのは東洲斎写楽の大首絵、初値が1,000万円を超えているのもある。写楽の作品は寛政6年のわずか1年足らずの間に描かれたものしかないからレア度が違うという。ふと見ると、外国人が熱心に浮世絵の状態を観察し、誰かに携帯電話でその絵について説明している。聞けば、神保町の浮世絵の画廊の店主だという。浮世絵のマーケットがあるのを実感する。



60 北 斎 HOKUSAI
富嶽三十六景 牛車
天保頃 1830s ¥300,000



61 北 斎 HOKUSAI
富嶽三十六景 相州江の島
天保頃 1830s ¥200,000



62 北 斎 HOKUSAI 百人一首乳母かゝとき 柿の本人画 天保頃 1830s ¥1,000,000

今年9月の第29回浮世絵オークションに出展された葛飾北斎の作品
浮世絵商協同組合提供

(3) 日本人の美意識

しかし、浮世絵に対するフランス人の期待を見事に裏切るかのようになり、今年開催される「ジャポニスム2018」の展示プログラムの中に「浮世絵展」はない。何故か？増田事務局長は、「それは、『ジャポニスム2018』は、19世紀のあの『ジャポニスム』ではないからです。」という。

「『ジャポニスム2018』は、どのようなコンセプトのもとに生まれたのでしょうか。その一つの答えは、自然を敬い、異なる価値観の調和を尊ぶ日本人の「美意識」です。

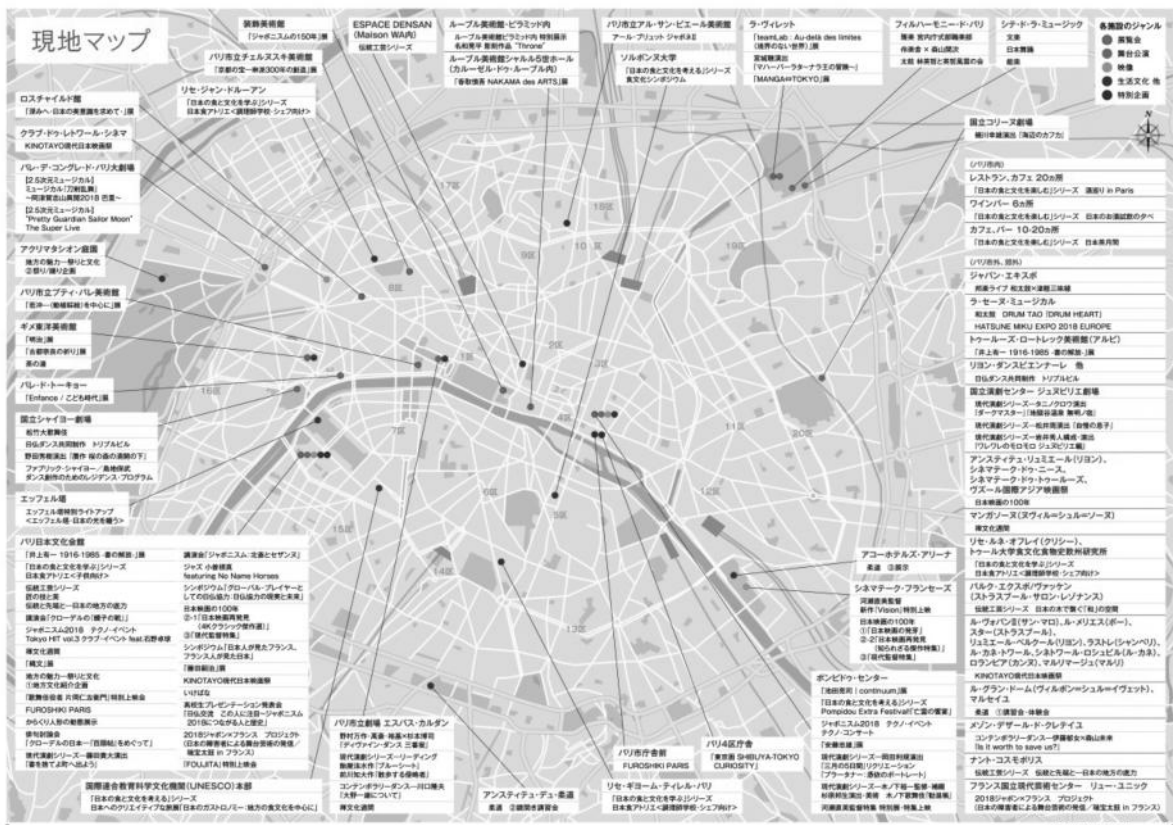
常に外部から異文化を取り入れ、自らの文化と響き合わせ融合させてきた日本人は、時に相反する価値観がぶつかりあいながらも調和し共存するところに「美」があると評価してきました。

日本文化の原点とも言うべき縄文や、伊藤若冲、琳派から、最新のメディア・アートやアニメ・マンガ・ゲームまで、舞台公演では、歌舞伎、能・狂言、雅楽から、現代演劇、初音ミクまで、さらには食や祭り、禅、武道、茶道、華道など日常生活に根ざした文化。このような日本文化の多様性、根底に流れる感受性や

美意識は、現代の排他的で混迷度を深めている国際社会が抱える問題解決の糸口になるかもしれません。」

「2020年の東京オリンピック・パラリンピックを見据えて、日本の地方の魅力もアピールし、訪日観光の促進や和食・日本酒、日本茶等、日本製品の海外展開に貢献したいと考えています。また、デザインやファッション、建築、テクノロジーなどの分野における創造力、むだを省いた「引き算」の美学なども世界を魅了する日本の文化といえるでしょう。」と増田事務局長は語る。

日本の美意識について、フランス人の視点からは、例えば、前述のフランス人美術史家ソフィー・リチャードは、「私が日本に恋をしたのは子どものときです。挿絵つきの本を飽かずに眺めていたものでした。その後も、井上靖や川端康成の小説を読み、熊井啓や黒澤明の映画を観るたびに、心は憧れの国へ飛んでいきました。何よりもわたしを魅了してやまなかったのは伝統的な美意識でした。…全てに美があふれていて、それまでわたしが知っていたものとは大きく違っていたのです。同時に、わたし自身の国の文化を神聖な気持ちで見つめ直し、あらためて考える機会に



「ジャポニスム2018」現地マップ

もなりました。」という。

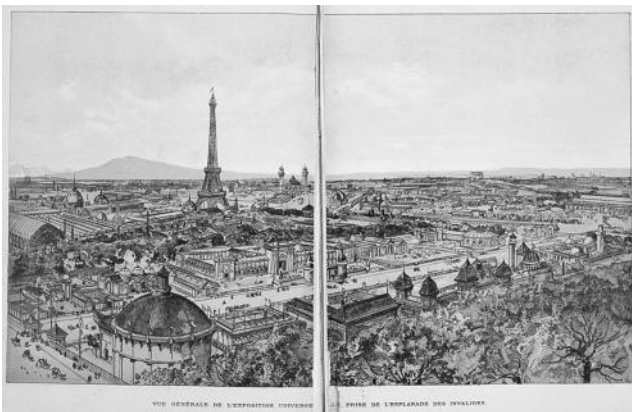
この「ジャポニスム2018」は、『日本の美』総合プロジェクト懇談会（主催：安倍総理、津川雅彦座長）の提言を受けて、2016年5月、安倍総理からオランダ仏大統領（当時）に対し、日仏友好160年にあたる2018年、パリを中心に大規模な日本文化紹介行事を実施することにつき協力を要請し、合意したことによる。

タイトルである「ジャポニスム2018：響きあう魂」には二つの意味が込められている。

1つは、過去から現代まで様々な日本文化の根底に存在する、自然を敬い、異なる価値観の調和を尊ぶ「美意識」。日本人は、常に外部から異文化を取り入れ、自らの文化と響き合わせ融合させることで、新しい文化を創造してきた。多様な価値が調和し、共存するところにこそ、善悪を超えた「美」があるとする日本文化ならではの「美意識」を世界に紹介すること。

2つ目は、日本とフランスの感性の共鳴。文化芸術を通して日本とフランスが感性を共鳴させ、協働すること、さらには共鳴の輪を世界にひろげていくことで、21世紀の国際社会が直面している様々な課題が解決に向かうことを期待するとされる。

(4) パリ



（エッフェル塔が最大の呼び物となったフランス革命100周年の1889年のパリ万博の鳥瞰図、博覧会—近代技術の展示場、国立国会図書館蔵）

なぜ、パリなのか。どの世界でも、一目置かれる存在というのはある。デザイナーの桂由美曰く、「モードの世界ではパリが一番。やはり皆パリを目指す。」モードに限らず、文化の世界ではフランスは一目も二目も置かれているらしい。アメリカ人がWonderful！と言っても、皆納得するわけではないが、フランス人

がTrès bien!と言うと、どうやら文化の世界では、フランス人が言うのならそうなのだろうということになるらしい。開催地としてフランスを選んだことについて、国際交流基金の安藤理事長は「まず、私たちはフランス人が日本文化を最もよく知っている人々と考えているからだ。この野心的な事業を進めるためには、世界的なショーウインドが必要だった。私たちはニューヨーク、ロンドンをはじめ多くの都市での開催の可能性を検討したが、結局パリは、文化という側面から、引き続き日本文化を世界全体に発信できる都市だという結論に達した」という。

とはいえ、フランスで事業を実施するのは容易ではないらしい。アメリカ人、イギリス人、ドイツ人、イタリア人、フランス人、日本人の客が乗った豪華客船が航海の最中に沈みだし、船長は乗客たちに速やかに船から脱出して海に飛び込むように、指示しなければならなくなったときに船長が言うセリフというジョークがある。アメリカ人には、「海に飛び込めば、あなたは英雄ですよ。」というべし。フランス人に対しては何と云うべきか。正解：「飛び込まないでください。」。ちなみに、日本人には、「みんな飛び込んでいますよ。」が正解とのこと。他の国向けのセリフはご想像に任せる。

日仏首脳間の合意でパリで日本博が開催されることとなっても、現場の美術館の館長、専門家が納得しないと動かない。彼らも、自分の客層に受けそうもないことはやらない。

ただ、いったん受けると決まれば、自分たちの固定客層に向けて、本気でPRする。本博覧会の記者発表も日仏の特色が良く表れていて、日本だとみんなが知っている有名人を呼ぶというような形になるが、フランスだと、ルーブル美術館の館長などが自分の言葉でとうとうとまくし立てる。

また、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会が決定されたブエノスアイレスでのIOC総会での高円宮妃殿下のスピーチの記憶も新しいが、フランス語は国際機関での公用語である。北米、カリブ海、南米、インド洋、中東、アジア、オセアニア、そして、近年、中国の影響力が急速に高まり、日本の存在感が薄れていくアフリカで過去にフランス統治下にあった国や地域では、フランスが公用語、通用語として今日



（GINZA SIXにて、ジャポニスム2018の記者発表会、寺島しのぶと野村萬斎）

も普通に用いられている。日本でも francophonie（フランス語を話す人々）のお祭りを在京のフランス語圏の大使館持ち回りでやっていて、4月にスイス大使館で開かれたレセプションに行くと、セネガル人のミュージシャンが民族衣装で演奏していたりする。フランス語のテレビなどのコンテンツとして取り上げられれば、広くフランス語圏をカバーし、直接手が届かない地域で日本への関心を高めることもできる。

（5）ジャポニスム2018の意義

ジャポニスム2018の増田事務局長は、「重要なのは、「ジャポニスム2018」が、パリでの数か月間の文化や芸術のイベントにとどまらないことです。単に一過性の花火に終わるのでは意味がありません。日本各地のお祭りや伝統工芸を通じて日本の魅力を紹介し、2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会に向けたインバウンド観光を促進する側面もあることです。世界的な和食ブームを視野に、日本酒や日本茶などの日本製品の海外展開にも貢献したい。つまり、日本の国益に直結する大規模プロジェクトとして位置づけています。」と語る。

かつて、19世紀の万国博覧会がジャポニスムを推進したように、そして、ヒューブナーやオールコックの旅行記が日本への憧憬を掻き立てたように、各地伝来の祭りや民族文化芸能、伝統工芸などがインバウンド観光を促進し、更に、ウィーンでうちわが飛ぶように売れたように、日本製品の海外展開を促進することも目指す、このプロジェクトは、普通の人達の生活に直接関係する、地方創生などにも資する取組である。

実際、奈良県は先に述べたギメ美術館で国宝の「木造金剛力士立像」などの仏像を展示する。更に、12の地方自治体の各地伝来の祭り・踊りとの民族芸能公演や生活文化企画の紹介もある。

こうして7月に始まったジャポニスム2018の多岐にわたる内容のご紹介については、次回に譲る。

主な参考文献

- ・外交青書2018、外務省
- ・国際交流基金 Japonismes 2018
- ・ジャポニスムと日本の近代 東田雅博、山川出版社、2017
- ・「大君の都」、ラザフォード・オールコック、山口光朝訳、岩波文庫、1962
- ・渋沢栄一滞在仏日記、渋沢栄一、1868
- ・「特命全権大使 米欧回覧実記」、久米邦武 博聞社、1878
- ・詩人大使ポール・クローデルと日本 アルバム・クローデル編集委員会、2017
- ・フランスを知る 新〈フランス学〉入門 東京都立大学 フランス文学研究室編、法政大学出版局、2003
- ・アンドレ・マルローの日本 著=ミシェル・テマン、訳=阪田由美子、TBSブリタニカ、2001
- ・別冊 太陽 明治の細密工芸、平凡社、2014
- ・フランス人がときめいた日本の美術館 ソフィー・リチャード、山本やよい訳、集英社インターナショナル、2016
- ・フランス・ジョーク集 磯村尚徳 編著、萩野弘巳 訳
- ・世界の日本人ジョーク集、早坂隆、中央公論新社、2006
- ・ル・モンド 2018年7月5日
- ・第29回 浮世絵オークション、日本浮世絵商協同組合、2018

Website等

- ・外務省のWebsite
https://www.mofa.go.jp/mofaj/p_pd/ca_opr/page25_001191.html
- ・外交青書・白書
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/bluebook/2017/html/chapter2_01_02.html#s2120102
- ・国立国会図書館のWebsite
http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_999350_po_139.pdf?contentNo=1&alternativeNo=
- ・博覧会—近代技術の展示場
<http://ndl.go.jp/exposition/index.html>
- ・近代日本人の肖像
<http://www.ndl.go.jp/portrait/>
- ・外交史料館のWebsite
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/archives/DT0004/0003/0008/0020/0005/index.djvu>
- ・国際交流基金のWebsite
<https://www.jpff.go.jp/j/about/area/japonismes/>
- ・ジャポニスム2018のWebsite
<https://japonismes.org/about>
- ・メールマガジン「をちこち」
<http://www.wochikochi.jp/report/2018/04/japonismes2018.php>
- ・清水三年坂美術館のWebsite
<http://www.sannenzaka-museum.co.jp/about.html>
- ・日本浮世絵商協同組合のWebsite
<http://www.ukiyoe.or.jp/union.html>